

60分でわかる新約聖書(1) 「マタイの福音書」

1. はじめに

(1) マタイの福音書の位置づけ

- ①旧約時代と新約時代の間、約400年の中間時代が入る。
 - * 中間時代に多くの重要なことが起こった。
 - * 覇権国が、アジア(ペルシヤ)からヨーロッパ(ローマ)に移行した。
 - * ユダヤ人の生活と信仰がギリシア文明の影響を受けた。
 - * 旧約時代にはなかった諸グループが誕生した。
 - * 会堂が各地に作られた。
 - * 口伝律法が発展した。
- ②マタイの福音書は、旧約時代と新約時代をつなぐブリッジである。
 - * それゆえ、新約聖書の最初に置かれている。
- ③聖書の中で最も重要な書は、創世記とマタイの福音書である。

(2) 著者と執筆年代

- ①元取税人で、12使徒のひとりとなったマタイである。
 - * 彼は、イエスに従うためにすべてを捨てた。

Mat 9:9 イエスはそこから進んで行き、マタイという人が収税所に座っているのを見て、「わたしについて来なさい」と言われた。すると、彼は立ち上がってイエスに従った。

- * しかし神は、マタイの経験と賜物をお用いになった。
- * その結果、マタイの福音書が生まれた。

- ②執筆年代は、紀元55~65年頃であろう。

2. アウトライン: マタイの福音書の特徴

- I. 時間順ではなくテーマ別
- II. 旧約聖書からの引用
- III. イエスの教えの強調
- IV. 神の国のプログラム
- V. 普遍的内容

結論

マタイの福音書について学ぶ。

I. 時間順ではなくテーマ別

1. マタイの福音書は、時間順に配列されたメシアの生涯の記録ではない。
 - (1) ルカの福音書は、時間の流れに忠実に物語が配列されている。

①ルカは歴史家である。

2. マタイの福音書は、テーマ別にまとめられたメシアの生涯の記録である。

(1) 取税人は、種々のテーマを整理し、まとめるのが得意である。

(2) 要約の例

①イエスの系図は3区分され、各区分は14代になっている。

②奇跡の記録は、8～10章に集中している。

③たとえ話は、13章に集中している。

④イエスへの敵対は、11～16章に集中している。

II. 旧約聖書からの引用

1. この書の対象はユダヤ人なので、旧約聖書からの引用が多いのは当然である。

(1) マタイは、イエスが約束のメシアであることを示そうとしている。

①旧約預言を60回以上引用し、イエスがそれを成就させたと書いている。

②「主が預言者を通して語られたことが成就するためであった」が定型句。

2. 引用の具体例

(1) 処女降誕 (マタ 1:23)

Isa 7:14 それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。

(2) ベツレヘムで誕生 (マタ 2:6)

Mic 5:2 「ベツレヘム・エフラテよ、／あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。／だが、あなたからわたしのために／イスラエルを治める者が出る。／その出現は昔から、／永遠の昔から定まっている。」

(3) 敵の手からの解放 (マタ 2:15)

Hos 11:1 「イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、／エジプトからわたしの子を呼び出した。

(4) ガリラヤでの奉仕 (マタ 4:15)

Isa 9:1 しかし、苦しみのあったところに闇がなくなる。／先にはゼブルンの地と／ナフタリの地は辱めを受けたが、／後には海沿いの道、ヨルダンの川向こう、／異邦の民のガリラヤは榮譽を受ける。

Isa 9:2 闇の中を歩んでいた民は／大きな光を見る。／死の陰の地に住んでいた者たちの上に／光が輝く。

(5) 肉体と霊の癒し (マタ 8:17)

Isa 53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、／私たちの痛みを担った。／それなのに、私たちは思った。／神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。

(6) たとえ話(マタ 13:34~35)

Psa 78:1 私の民よ 私の教えを耳に入れ／私の口のことばに耳を傾けよ。

Psa 78:2 私は口を開いて たとえ話を／昔からの謎を語ろう。

(7) 勝利の入城(マタ 21:5~7)

Zec 9:9 娘シオンよ、大いに喜べ。／娘エルサレムよ、喜び叫べ。／見よ、あなたの王があなたのところに来る。／義なる者で、勝利を得、／柔和な者で、ろばに乗って。／雌ろばの子である、ろばに乗って。

Ⅲ. イエスの教えの強調

1. 四福音書の中で、イエスの教えを一番多く記しているのは、マタイである。

(1) 取税人の特徴と賜物が生かされている。

①取税人は、速記の技能を身に付けていた。

②山上の垂訓は、ほぼイエスのことばそのものである。

(2) 教えに関しては、5つのブロックが存在する。

2. 5つのブロックの具体例

(1) マタ 5~7章 山上の垂訓

①弟子たちに向けられた教えである。

②メシアによるモーセの律法の解釈である。

(2) マタ 10章 弟子たちを派遣する際のメッセージ

①イスラエルの家の失われた羊のところに行け。

②「天の御国は近づいた」と宣べ伝えよ。

③これは、イスラエルに対するメシア的王国の提示である。

(3) マタ 13章 たとえ話

①ベルゼブル論争の後で語られたたとえ話である。

②イスラエルがメシアを拒否して以降の霊的状态を教えている。

③この状態を「奥義としての王国」と呼ぶ。キリスト教界のことである。

(4) マタ 23章 イスラエルの霊的指導者たちの叱責

①イスラエルは、民族的にメシアを拒否した。

②その結果、神の裁きが下る。

(5) マタ 24~25章 オリーブ山の説教

①エルサレムと諸国民の将来に関する預言である。

②メシアの再臨と裁きに関する預言である。

IV. 神の国のプログラム

1. ユダヤ人の疑問

- (1) マタイは、イエスが「約束のメシア」であることを示した。
 - ①イエスは、旧約聖書のメシア預言を成就した。
- (2) 当然の疑問は、「では、メシアがもたらすはずの神の国はどうなったのか」。
 - ①旧約預言のクライマックスは、メシアがもたらす神の国である。

2. 「イエスの教えの強調」の中で、マタイはその疑問に答えている。

(1) マタ 5～7章 山上の垂訓

- ①イエスは、御自身を神の国の王として示された。

(2) マタ 10章 弟子たちを派遣する際のメッセージ

- ①王は弟子たちを派遣し、イスラエルに対して神の国を提示された。

(3) マタ 13章 たとえ話

- ①ベルゼブル論争で、イスラエルはイエスを王として受け入れることを拒否した。
- ②神の国の提示は、その時代のイスラエルからは取り去られた。
- ③旧約聖書では預言されていなかった「奥義としての王国」の時代に入る。

(4) マタ 23章 イスラエルの霊的指導者たちの叱責

- ①不信仰のゆえに、イスラエルに神の裁きが下ることが確定した。

(5) マタ 24～25章 オリーブ山の説教

- ①イスラエルに下る裁きに関する預言である。
- ②メシアの再臨に関する預言である。
- ③取り去られた神の国が、いかにして成就するかに関する預言である。

V. 普遍的内容

1. マタイの福音書はユダヤ人のために書かれたが、普遍的内容も含んでいる。

(1) マタ 1:1

Mat 1:1 アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。(新改訳 2017)

Mat 1:1 初めに、イエス・キリストの先祖の名前を記すことから始めましょう。イエス・キリストはダビデ王の子孫、さらにさかのぼってアブラハムの子孫です。(リビングバイブル)

(2) 原文の語順は、ダビデ、アブラハムである。

- ①マタイの意図は「王なるお方は、ダビデ王の子孫して来られる」ということ。

- ②イエスは、ご自分の民のところに王として来られたが、拒否された。
- ③そこで、諸国民に神の国への招待状が届けられることになった。

2. 普遍的内容の例

(1) アブラハム契約の中に、すでに普遍的内容が含まれている。

Gen 12:1 【主】はアブラムに言われた。／「あなたは、あなたの土地、／あなたの親族、あなたの父の家を離れて、／わたしが示す地へ行きなさい。

Gen 12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、／あなたを祝福し、／あなたの名を大いなるものとする。／あなたは祝福となりなさい。

Gen 12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、／あなたを呪う者をのろう。／地のすべての部族は、／あなたによって祝福される。」

- (2) 東方の博士たちの礼拝(マタ2:1~12)
- (3) 信仰のある百人隊長(マタ8:5~13)
- (4) カナン人の女(マタ15:22~28)
- (5) 大宣教命令

Mat 28:18 イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。

Mat 28:19 ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、

Mat 28:20 わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

結論

1. パリサイ人とサドカイ人の失敗

- (1) 旧約聖書を学んでいた。
- (2) しかし、霊の目は閉ざされていた。
- (3) 自分が描くメシア像を求めた。
- (4) イエスは、それに合致しなかった。

2. 私たちの問題

- (1) 神が私たちを選ぶのか、私たちが神を選ぶのか。
- (2) 私たちが求める神は、愛と恵みに富んだ神である。
- (3) しかし、聖であり、義であり、裁きを行う神は、求めたくない。
- (4) そのような神は、偶像に等しい。
- (5) 神は、イエス・キリストを通してご自身に近づく人を求めておられる。
- (6) 神に忠実に歩む人を求めておられる。

60分でわかる新約聖書(2) 「マルコの福音書」

1. はじめに

(1) マルコの福音書の位置づけ

- ①マルコの福音書は、最も短い福音書である。
- ②マルコ書の内容の約90%が、マタイとルカにも含まれている。
- ③4世紀から19世紀に至るまで、学者たちはマルコを重視して来なかった。
- ④19世紀末から、マルコが最初に書かれた福音書だという認識が広まった。
- ⑤福音書は、単なるイエス・キリストの伝記ではない。
- ⑥4人の著者たちは、ある読者を想定し、その必要に答えるために執筆した。
- ⑦マルコの視点は、牧会者のそれである。

*信仰に入って間のないローマ人クリスチャンを励ますために書いた。

*キリストの弟子として生きることを教えるために書いた。

(2) 著者と執筆年代

- ①初期の教会教父たちは、マルコが著者であると証言している。
- ②使12:12

Act 12:12 こうとわかったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家へ行った。そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた。

- ③彼の母は、初代教会の指導者のひとりで、エルサレムに家を持っていた。
- ④彼は、バルナバのいとこであった(コロ4:10)。
- ⑤また彼は、ペテロの同労者でもあった。

1Pe 5:13 バビロンにいる、あなたがたとともに選ばれた婦人がよろしくと言っています。また私の子マルコもよろしくと言っています。

- ⑥執筆年代は、紀元55~59年頃であろう(紀元70年以前)。

2. アウトライン: マルコの福音書の特徴

- I. イエスの行動の強調
 - II. 目撃者の証言
 - III. 十字架と復活に向って進むイエス
 - IV. イエスの弟子であることの意味
- 結論

マルコの福音書について学ぶ。

I. イエスの行動の強調

1. イエスの教えよりも行動が強調されている。

(1) 18の奇跡が記録されている。

①たとえ話はわずか4つである。

(2) 長い説教は、わずか1つである。

①マコ13:3~7 オリーブ山の説教

(3) 「教えられた」という表現が繰り返し出て来るが、内容は書かれていない。

①マコ1:21

Mar 1:21 それから、一行はカペナウムに入った。そしてすぐに、イエスは安息日に会堂に入って教えられた。

②マコ1:39

Mar 1:39 こうしてイエスは、ガリラヤ全地にわたり、その会堂に行き、福音を告げ知らせ、悪霊を追い出された。

II. 目撃者の証言

1. 表現が非常に生々しい。

(1) ペテロが情報源になっている。

①マコ2:4

Mar 2:4 群衆のためにイエスに近づくことができなかったので、その人々はイエスのおられるあたりの屋根をはがし、穴をあけて、中風の人を寝かせたままその床をつり降ろした。

②マコ4:37~38

Mar 4:37 すると、激しい突風が起り、舟は波をかぶって、水でいっぱいになった。

Mar 4:38 ところがイエスだけは、ともものほうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われないのですか。」

(2) 自分を登場させている。

①マコ14:51~52

Mar 14:51 ある青年が、素はだに亜麻布を一枚まとったままで、イエスについて行ったところ、人々は彼を捕らえようとした。

Mar 14:52 すると、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、はだかで逃げた。

2. 文学的な文章ではなく、日常会話に近い平易なギリシア語である。

(1) 歴史的現在形という時制が頻繁に用いられている。

①150回以上

(2) 「すぐに」(ユーセイ)が42回出て来る。

①マコ1:10

Mar 1:10 そして、水の中から上がられると、すぐそのとき、天が裂けて御霊が鳩のように自分の上に下られるのを、ご覧になった。

②マコ1:17~18

Mar 1:17 イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」

Mar 1:18 すると、すぐに、彼らは網を捨て置いて従った。

③マコ1:21

Mar 1:21 それから、一行はカペナウムに入った。そしてすぐに、イエスは安息日に会堂に入って教えられた。

Ⅲ. 十字架と復活に向って進むイエス

1. ピリポ・カイザリヤでのペテロの信仰告白以降、イエスは十字架に向って進まれた。

(1) ピリポ・カイザリヤ→ガリラヤ→エルサレム

①マコ8:31

Mar 8:31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。

②マコ9:33

Mar 9:33 カペナウムに着いた。イエスは、家に入った後、弟子たちに質問された。「道で何を論じ合っていたのですか。」

③マコ10:32

Mar 10:32 さて、一行は、エルサレムに上る途中にあった。イエスは先頭に立って歩いて行かれた。弟子たちは驚き、また、あとについて行く者たちは恐れを覚えた。すると、イエスは再び十二弟子をそばに呼んで、ご自分に起ころうとしていることを、話し始められた。

(2) 最後の1週間の記録が全体の約36%を占める。

①エルサレム入城(マコ11:1~11)

②復活(マコ16:1~8)

Ⅳ. イエスの弟子であることの意味

1. イエスが神の子であることが強調されている。

(1) 冒頭の聖句は、系図ではない。異邦人は系図に興味を持たない。

①マコ1:1

Mar 1:1 神の子イエス・キリストの福音のはじめ。

(2) 父なる神がこれを承認した。

①マコ1:11

Mar 1:11 そして天から声がした。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」

②マコ9:7

Mar 9:7 そのとき雲がわき起こってその人々をおおい、雲の中から、「これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい」という声がした。

(3) 悪霊もこれを認めた。

①マコ3:11

Mar 3:11 また、汚れた霊どもが、イエスを見ると、みもとにひれ伏し、「あなたこそ神の子です」と叫ぶのであった。

②マコ5:7

Mar 5:7 大声で叫んで言った。「いと高き神の子、イエスさま。いったい私に何をしようというのですか。神の御名によってお願いします。どうか私を苦しめないでください。」

(4) イエスもこれを認めた。

①マコ14:61~62

Mar 14:61 しかし、イエスは黙ったままで、何もお答えにならなかった。大祭司は、さらにイエスに尋ねて言った。「あなたは、ほむべき方の子、キリストですか。」

Mar 14:62 そこでイエスは言われた。「わたしは、それです。人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るはずです。」

(5) ローマ人の百人隊長もこれを認めた。

①マコ15:39

Mar 15:39 イエスの正面に立っていた百人隊長は、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「この方はまことに神の子であった」と言った。

(6) その他の証拠

- ①権威ある教え
- ②病を癒す権威
- ③悪霊に対する権威
- ④自然界を支配する権威

⑤死に打ち勝つ権威

2. 弟子たちの理解が遅いことが強調されている。

(1) 個人的な教えを受けながら、理解が進まなかった。

①マコ4:13

Mar 4:13 そして彼らにこう言われた。「このたとえがわからないのですか。そんなことで、いったいどうしてたとえの理解ができませんよう。」

②マコ8:17~21

Mar 8:17 それに気づいてイエスは言われた。「なぜ、パンがないといって議論しているのですか。まだわからないのですか、悟らないのですか。心が堅く閉じているのですか。」

Mar 8:18 目がありながら見えないのですか。耳がありながら聞こえないのですか。あなたがたは、覚えていないのですか。」

Mar 8:19 わたしが五千人に五つのパンを裂いて上げたとき、パン切れを取り集めて、幾つのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「十二です。」

Mar 8:20 「四千人に七つのパンを裂いて上げたときは、パン切れを取り集めて幾つのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「七つです。」

Mar 8:21 イエスは言われた。「まだ悟らないのですか。」

(2) イエスが一番教えたかったのは、「苦難のしもべ」というメシア像である。

①マコ10:45

Mar 10:45 人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」

*イザ52:13~53:12の預言の成就

②イエスは栄光の王として戻って来られるが、その前に受難のしもべとして父なる神の御心に忠実に歩まれる。

③弟子たちには、理解するのが難しかった。

結論

1. マルコの福音書の執筆目的は、牧会的なものである。

(1) ローマのクリスチャンたちはすでに福音を信じていた。

①ロマ1:8

Rom 1:8 まず第一に、あなたがたすべてのために、私はイエス・キリストによって私の神に感謝します。それは、あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。

(2) 彼らは、困難な状況の中で、自らの信仰内容を再確認する必要があった。

①特に、イエスの弟子であることの意味を再確認する必要があった。

②そのために、イエスの行いと教えを学び直す必要があった。

③読者は、12使徒と自分を重ね合わせてこれを読むことを期待されている。

④マコ8:34~35

Mar 8:34 それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

Mar 8:35 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。

2. マルコ自身も、イエスの弟子として成長した。

(1) 第一次伝道旅行で、マルコは、バルナバとサウロの助手として奉仕した。

①第二次伝道旅行で、マルコを参加させるかどうかで論争が起こった。

②結果的に、2つの伝道隊が誕生した。

(2) パウロは晩年になって、マルコの奉仕を評価するようになった。

2Ti 4:11 ルカだけは私とともにおります。マルコを伴って、いっしょに来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。

3. パウロは、マルコの福音書のテーマをこのように要約している。

(1) ピリ2:3~11

Php 2:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。

Php 2:4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。

Php 2:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。

Php 2:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、

Php 2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、

Php 2:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。

Php 2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。

Php 2:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、

Php 2:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。

60分でわかる新約聖書(3) 「ルカの福音書」

1. はじめに

(1) ルカの福音書の位置づけ

- ①ルカの福音書と使徒の働きで、新約聖書の28%を占めている。
- ②共観福音書のひとつではあるが、他の福音書にはない箇所が多く出て来る。
 - *20の奇跡物語が出て来るが、その内の6つはルカだけのもの。
 - *23のたとえ話が出て来るが、その内の18はルカだけのもの。
 - ・放蕩息子のたとえ
 - ・良きサマリヤ人のたとえ
 - *ヨハネとイエスの誕生物語が詳細に語られている。
 - *12歳のイエスの物語はルカだけのものである。
 - *9:51~19:27は、ルカ独特の箇所である。
- ③福音書は、単なるイエス・キリストの伝記ではない。
- ④4人の著者たちは、ある読者を想定し、その必要に答えるために執筆した。
- ⑤ルカは、理想的な人間イエスを描写している。
 - *ギリシア人(異邦人)読者を想定して執筆している。

(2) 著者

- ①ルカの福音書にも使徒の働きにも、ルカという名称は出て来ない。
- ②使徒の働きは、ルカの福音書の続編である。
- ③使徒の働きには、「we」セクションが出て来る。
 - *使16:10~17、20:5~21:18、27:1~28:16
 - *ルカがパウロに同行している箇所である。
- ④使徒の働きの著者はルカである。
 - *それゆえ、ルカの福音書の著者もルカである。
- ⑤ルカという名前は、新約聖書の中に3回出ている。

*コロ4:14

Col 4:14 愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと書いています。

*2テモ4:11

2Ti 4:11 ルカだけは私とともにおります。マルコを伴って、いっしょに来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。

*ピレ1:24

Phm 1:24 私の同労者たちであるマルコ、アリストアルコ、デマス、ルカからもよろしくと書いています。

- ⑥ルカは異邦人であったとするのが通説である。

*根拠は、コロ4:14でルカが異邦人たちの中に置かれていること。

⑦ルカはユダヤ人であったとする節もある(フルクテンバウム師)。

*ユダヤ人の習慣を知悉している。

*エルサレムに対する愛が顕著である。

*ロマ3:1~2

Rom 3:1 では、ユダヤ人のすぐれたところは、いったい何ですか。割礼にどんな益があるのですか。

Rom 3:2 それは、あらゆる点から見て、大いにあります。第一に、彼らは神のいろいろなおことばをゆだねられています。

(3) 執筆年代

①使徒の働きは、パウロがローマの獄中にある時点で終わっている。

*これは、ネロによる迫害(紀元64年)以前のことである。

②紀元64年の前に使徒の働きが完成していたと見るべきである。

③ルカの福音書はそれよりも数年前、58年~60年頃に書かれたと思われる。

2. アウトライン: ルカの福音書の特徴

I. 2つの執筆目的

II. 異邦人読者

III. 福音の普遍性の強調

IV. 祈りの強調

V. パウロの影響

結論

ルカの福音書について学ぶ。

I. 2つの執筆目的

1. テオピロの信仰を励ますため

(1) ルカの福音書も使徒の働きも、テオピロに献上された。

①キリストに対する信仰は、歴史的事実の上に築かれている。

(2) ルカは歴史家である。

①ルカ1:3

Luk 1:3 私も、すべてのことを初めから綿密に調べておりますから、あなたのために、順序を立てて書いて差し上げるのがよいと思います。尊敬するテオピロ殿。

②目撃者たちから情報を得た。

③ヘロデの王宮とも接触があった。

*国主ヘロデの乳兄弟マナエン(使13:1)

- ④当時流布していた諸資料を吟味した。
- ⑤聖霊の導きによって、それらの出来事を時間順にまとめた。

2. イエスを「人の子」として示すため

- (1) ギリシア人たちは、理想的な人間像を求めていた。
 - ①ルカはイエスを、力強いが、憐れみに富んだ方として描いた。
- (2) ユダヤ人たちは、「人の子」を拒絶した。
 - ①その結果、異邦人に福音が伝えられるようになった。
 - ②異邦人もまた、神の国のプログラムを知り、救われるように招かれた。

II. 異邦人読者

1. メシアの系図が、ヨセフから始まり、アダムにまで遡っている。

- (1) マタ1:1

Mat 1:1 アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。

- (2) ルカ3:38

Luk 3:38 エノスの子、セツの子、アダムの子、このアダムは神の子である。

2. ユダヤの地名に解説を入れている。

- (1) 「ガリラヤの町カペナウム」(4:31)
- (2) 「ガリラヤの向こう側のゲラサ人の地方」(8:26)
- (3) 「さてイエスは、昼は宮で教え、夜はいつも外に出てオリーブという山で過ごされた」(21:37)
- (4) 「アリマタヤというユダヤ人の町の人」(23:51)

3. ユダヤ的概念や用語を避けている。

- (1) ラビの代わりに、「didaskalos」(先生)というギリシア語を使用している。
- (2) メシア預言の成就にさほど触れていない。
 - ①メシア預言の成就という表現が5度出てくる。
 - ②その内の4回までは、イエスのイスラエルに対する教えの中で出て来る。

III. 福音の普遍性の強調

1. ユダヤ人社会の底辺にいる人たちへの愛

- (1) 罪人たち、取税人たち、村八分になった人たち
- (2) 婦人たち、子どもたち

(3) イエスは、人間が経験する痛みや悲しみをよく知っておられた。

2. 異邦人たちやサマリヤ人たちへの愛

(1) 異邦人たちも、メシアの祝福に与った。

(2) サマリヤ人たちは、メシアを信じる信仰へと導かれた。

IV. 祈りの強調

1. 重要な局面でのイエスの祈り

(1) ルカ 3 : 21

Luk 3:21 さて、民衆がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマをお受けになり、そして祈っておられると、天が開け、

(2) ルカ 5 : 16

Luk 5:16 しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。

(3) ルカ 6 : 12

Luk 6:12 このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。

(4) ルカ 22 : 32

Luk 22:32 しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

(5) ルカ 22 : 40～41

Luk 22:40 いつもの場所に着いたとき、イエスは彼らに、「誘惑に陥らないように祈っていなさい」と言われた。

Luk 22:41 そしてご自身は、弟子たちから石を投げて届くほどの所に離れて、ひざまずいて、こう祈られた。

V. パウロの影響

1. ルカはパウロの伝道旅行に参加し、パウロの教えの影響を受けたはずである。

(1) 信仰

(2) 悔い改め

(3) 憐れみ

2. 赦しの強調

(1) ルカ 3 : 3

Luk 3:3 そこでヨハネは、ヨルダン川のほとりのすべての地方に行って、罪が赦されるための悔い改めに基づくバプテスマを説いた。

(2) ルカ 5 : 18～26

①屋根から降り降ろされた病人へのことば

② 「「友よ。あなたの罪は赦されました」

(3) ルカ 6 : 37

Luk 6:37 さばいてはいけません。そうすれば、自分もさばかれません。人を罪に定めてはいけません。そうすれば、自分も罪に定められません。赦しなさい。そうすれば、自分も赦されます。

(4) ルカ 7 : 36~50

① イエスの足に香油を注いだ罪の女

② 「だから、わたしは『この女の多くの罪は赦されている』と言います。それは彼女がよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません」

(5) ルカ 17 : 3~4

Luk 17:3 気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。

Luk 17:4 かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」

(6) ルカ 23 : 34

Luk 23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。

(7) ルカ 24 : 47

Luk 24:47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。

結論

1. 1 コリ 15 : 45~47

1Co 15:45 聖書に「最初の人アダムは生きた者となった」と書いてありますが、最後のアダムは、生かす御霊となりました。

1Co 15:46 最初にあったのは血肉のものであり、御霊のものではありません。御霊のものはあとに来るのです。

1Co 15:47 第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、第二の人は天から出た者です。

(1) イエスは、最後のアダムである。

① アダムとは、人類の代表である。

② 最初のアダムは血肉のものであり、墮落した。

③ 最後のアダムは、御霊のものであり、生かす御霊となった。

④ イエスの後に、人類の代表となるアダムは登場しない。

(2) イエスは、第2の人である。

①イエスに続く第3の人、第4の人、第1000の人が出て来る。

②ヘブ2:17

Heb 2:17 そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。

③救いの完成は、イエスのようになることである。

(3) イエスは、栄光の体に復活された。

①ルカ24:15~16

Luk 24:15 話し合ったり、論じ合ったりしているうちに、イエスご自身が近づいて、彼らとともに道を歩いておられた。

Luk 24:16 しかしふたりの目はさえぎられていて、イエスだとはわからなかった。

(4) ルカの福音書の要約

①神が人となられた。

②このお方は、完璧な人であった。

③このお方は、罪人の罪を贖うために死なれた。

④そして、栄光の体に復活された。

⑤ユダヤ人がイエスを拒否したので、福音は異邦人に伝えられるようになった。

⑥イエスは、栄光の体を持ちながら今も生きておられる。

⑦最後のアダムであるイエスにつながるなら、その人は、「理想の人」として完成される。

60分でわかる新約聖書(4) 「ヨハネの福音書」

1. はじめに

(1) ヨハネの福音書の位置づけ

- ① マタイ、マルコ、ルカは共観福音書と呼ばれる。
- ② ヨハネの福音書は、第4福音書と呼ばれる。
- ③ 4つの福音書の特徴
 - * マタイは、キリストを「ユダヤ人の王」として描いた。読者はユダヤ人。
 - * マルコは、キリストを「しもべ」として描いた。読者はローマ人。
 - * ルカは、キリストを「人の子」として描いた。読者はギリシア人。
 - * ヨハネは、キリストを「神の子」として描いた。読者は全世界。
- ④ 共観福音書は、キリストの生涯の出来事について記録している。
- ⑤ ヨハネの福音書は、それらの出来事の霊的意味について解説している。
 - * 五千人のパンの奇跡は、すべての福音書が取り上げている。
 - * しかし、「いのちのパン」のメッセージを記録しているのはヨハネだけ。
- ⑥ ヨハネは、「奇跡」ではなく、「しるし」という言葉を使っている。

(2) 著者

① ヨハ 19:35

Joh 19:35 それを見た者があかしをした。そして、そのあかしは真実である。その人は、自分が真実を語っていることを知っている。それは、あなたがたも信ずるようになるためである。

- ② 著者は目撃者である。
- ③ 「主に愛された弟子」である。
- ④ ゼベダイの子ヨハネである(共観福音書から判断できる)

(3) 執筆年代

- ① 最後に書かれた福音書である。
- ② 恐らく、紀元85年～95年の間に書かれたのであろう。

2. アウトライン: ヨハネの福音書の特徴

- I. 執筆目的
- II. 7つの神性宣言
- III. 7つのしるし
- IV. 信仰と不信仰の対立
- 結論: 信仰と不信仰の葛藤

ヨハネの福音書について学ぶ。

I. 執筆目的

1. 伝道的目的

(1) ヨハ 20 : 30~31

Joh 20:30 イエスは弟子たちの前で、ほかにも多くのしるしを行われたが、それらはこの書には書かれていない。

Joh 20:31 これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。

- ①イエスは神の子キリストである。
- ②そのことを証明する「しるし」をイエスは数多く行われた。
- ③その中から7つのしるしを選ばれ、書き記された。
 - *ヨハネは、聖霊の導きによって7つの奇跡を選んだ。
 - *ちなみに、4つの福音書には35の奇跡が記録されている。
- ④イエスをメシアとして信じる者は、イエスの御名によっていのちを得ることができる。

(2) 読者は、イエスが行った「しるし」の意味を熟考する必要がある。

- ①ヨハネの福音書は、読者の信仰か不信仰かを選ぶように迫ってくる。

II. 7つの神性宣言

はじめに

- ①「I am ○○」は、神の永遠性を示す神性宣言である。
- ②ギリシア語では、「エゴウ エイミ」である。
- ③ヨハネは、イエスによる7つの神性宣言を記している。

1. 「わたしはいのちのパンです」

(1) ヨハ 6 : 35

Joh 6:35 イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。

(2) モーセが与えたパンと自分が与えるパンとの対比

2. 「わたしは世の光です」

(1) ヨハ 8 : 12

Joh 8:12 イエスは再び人々に語られた。「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」

(2) 光と闇の対比

3. 「わたしは羊たちの門です」

(1) ヨハ 10:7

Joh 10:7 そこで、再びイエスは言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしは羊たちの門です。」

(2) 盗人と羊の門の対比

4. 「わたしは良い牧者です」

(1) ヨハ 10:11

Joh 10:11 わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。

(2) 良い牧者と悪い牧者の対比

5. 「わたしはよみがえりです。いのちです」

(1) ヨハ 11:25

Joh 11:25 イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」

(2) いのちと死の対比

6. 「わたしは道であり、真理であり、いのちです」

(1) ヨハ 14:6

Joh 14:6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」

(2) 「迷子の状態、無知な状態、死んだ状態」と「道、真理、いのち」の対比

7. 「わたしはまことのぶどうの木」

(1) ヨハ 15:1

Joh 15:1 わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫です。

(2) キリストに留まることと、離れることの対比

III. 7つのしるし

はじめに

①キリストの神性を示す7つのしるし

②しるし(サイン)とは、神学的意味を持った奇跡のことである。

1. 水がぶどう酒に変わった奇跡(ヨハ2:1~11)

- (1) カナの婚礼で、ぶどう酒が切れた。
- (2) 母マリヤがイエスに助けを求めた。
- (3) イエスは母マリヤに、「あなたは、わたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません」とお答えになった。
- (4) 「時」とは十字架の時を指す。
- (5) イエスは、石の水がめの水を取り、それをぶどう酒に変えた。
- (6) この奇蹟は2つの結果を生んだ。
 - ①主イエスの栄光が現れた。
 - ②弟子たちは、イエスをメシアと信じたことが正しかったことを確信し、より深い信仰へと導かれた。
- (7) ぶどう酒(喜び)が切れたとき、イエスをそこに招き入れる人は幸いである。

2. 王室の役人の息子の癒し(ヨハ4:46~54)

- (1) 王室の役人が、息子が死にかかっていたため、イエスに助けを求めに来た。
- (2) カペナウムからカナまでの距離は約30km。
- (3) イエスは「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています」と声をかけた。
- (4) 役人は、イエスが言われた「ことば」を信じて、帰途に就いた。
- (5) イエスが声をかけたその時間に、息子が直った。
- (6) イエスのことばに信頼する信仰が、家族の中に生まれた。

3. ベテスダの池での病人の癒し(ヨハ5:1~9)

- (1) 彼は、長い間(38年間)病気に罹っており、絶望していた。
- (2) この病人は、いわば「他者依存症」という病にかかっているような状態。
- (3) イエスは、「よくなりたいか」と声をかけ、彼の興味を引いた。
- (4) イエスは、「起きて、床を取り上げて歩きなさい」と言われた。
- (6) そのことばに応答した彼は、すぐに直って、床を取り上げて歩き出した。
- (7) この「しるし」は、イエスのメシア性をイスラエルに示すためのものである。

4. 5千人のパンの奇跡(ヨハ6:1~14)

- ①このしるしは、群集に対する憐れあわれみが動機となって行われたものである。
- ②またこのしるしは、弟子たちを訓練するためのものでもあった。
- ③弟子たちの使命は、自分の持てるものをすべて差し出し、メシアが与えてくださるものを受けて、それを人々に分配することである。
- ④このしるしは、「いのちのパン」のメッセージにつながる。

5. 嵐を静める奇跡(ヨハ6:16~21)

- (1) 弟子たちだけで舟に乗り込み、向こう岸(カペナウム)に渡ろうとした。
- (2) 湖は強風で荒れ始め、9時間も嵐の中をさまよう結果となった。
- (3) 彼らは、嵐の中で自分たちが無力であることを痛感した。
- (4) イエスが近づいて来るのを見た彼らは、恐れた。
- (5) イエスは彼らに、「わたしだ。恐れることはない」と声をかけた。
- (6) イエスを舟に招き入れると、湖は静まり、舟はすぐに目的地に着いた。
- (7) 彼らはイエスを信じていたが、それを生活に適用することができなかった。

6. 生まれつきの盲人の癒し(ヨハ9:1~7)

- (1) イエスは、「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです」と言われた。
- (2) これは安息日に起こった癒しである。
- (3) イエスは、つばきで泥を作り、それを盲人の目に塗られた。
- (4) イエスは、「行って、シロアムの池で洗いなさい」とお命じになった。
- (5) この癒しは、多くの目撃者がいる所で起こった。

7. ラザロの蘇生(ヨハ11:38~45)

- (1) イエスは、ラザロの墓の前で涙を流された。
- (2) イエスは、死んで4日も経つラザロを蘇生させた。
- (3) この奇蹟は、イエスが死者をよみがえらせる権威を持ったメシアであることを証明している。

結論：信仰と不信仰の葛藤

1. イスラエルの民によるメシア拒否

- (1) ヨハ1:11

Joh 1:11 この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。

- (2) ユダヤ人のほとんどがイエスが行ったしるしを拒否し、不信仰がますます強くなって行った。
- (3) その極みが、「十字架につけろ」という叫びである。
- (4) ヨハ19:15

Joh 19:15 彼らは叫んだ。「除け、除け、十字架につけろ。」ピラトは言った。「おまえたちの王を私が十字架につけるのか。」祭司長たちは答えた。「カエサルのほかには、私たちに王はありません。」

2. イエスを信じる少数の人々

- (1) 弟子たち
- (2) 王室の役人
- (3) サマリヤ人
- (4) からだに麻痺のある人
- (5) 盲人
- (6) アリマタヤのヨセフとニコデモ
- (7) その極みが、トマスの叫びである。
- (7) ヨハ 20 : 28~29

Joh 20:28 トマスはイエスに答えた。「私の主、私の神よ。」

Joh 20:29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。」

3. 今日でも同じ葛藤が存在する。

- (1) 信仰の道か、不信仰の道か。
- (2) ヨハ 20 : 30~31

Joh 20:30 イエスは弟子たちの前で、ほかにも多くのしるしを行われたが、それらはこの書には書かれていない。

Joh 20:31 これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。

- (3) あなたは、信じて、イエスの名によっていのちを得たか。

60分でわかる新約聖書(5) 「使徒の働き」

1. はじめに

(1) 使徒の働きの位置づけ

- ①新約聖書の中で最も長い書である(28章、1,007節)。
- ②四福音書に続く唯一の歴史書である。
- ③パウロ書簡が書かれた背景と状況を説明してくれる書である。
 - *この書なしには、パウロ書簡を十分に理解することはできない。
 - *パウロがいかにして使徒になったのかも分からない。
- ④初代教会の状況を説明してくれる書である。
 - *使徒の働きがなければ、初期の信者たちが経験した葛藤、失望、神学的課題、希望などを理解することはできなかつたであろう。
- ⑤使徒の働きの重要性を低く見積もってはならない。

(2) タイトル

- ①伝統的に「使徒の働き」(The Acts of the Apostles)である。
- ②しかし、使徒たち全員の働きが均等に記録されているわけではない。
 - *ペテロとパウロだけが強調されている。
 - *使徒ヨハネは登場するが、彼の言葉は記されていない。
 - *使徒ヤコブの死は、たった1節の説明で終わっている(使12:12)。
- ③「ある使徒たちのある働き」(Certain Acts of Certain Apostles)である。
- ④もっと正確には、「聖霊の働き」である。
 - *あるいは、「聖霊を通じた復活のイエスの働き」である。

(3) 著者

- ①ルカの福音書の著者と同じくルカである。
 - *使1:1~2

Act 1:1 テオフィロ様。私は前の書で、イエスが行い始め、また教え始められたすべてのことについて書き記しました。

Act 1:2 それは、お選びになった使徒たちに聖霊によって命じた後、天に上げられた日までのことでした。

- ②ルカは、聖霊に導かれこの書を書いた。
- ③ルカが使用した資料は、どのようなものか。

*個人的体験(私たち章句)

・使16:10~17、20:5~15、21:1~18、27:1~28:16

*パウロから教えられた情報

- ・パウロの回心体験
- *他の目撃者たちの証言
- ・使 20 : 4~5

Act 20:4 彼に同行していたのは、ピロの子であるベレア人ソパテロ、テサロニケ人のアリスタルコとセクンド、デルベ人のガイオ、テモテ、アジア人のティキコとトロフィモであった。

Act 20:5 この人たちは先に行って、トロアスで私たちを待っていた。

- ・エルサレムの使徒たちと兄弟たちの証言

(4) 執筆年代

- ①エルサレム崩壊(紀元70年)以前である。
 - ②パウロの死(紀元66~68年)以前である。
 - ③皇帝ネロによる迫害(紀元64年)以前である。
 - ④恐らく、紀元60~62年頃であろう。
- *ルカは、教会が誕生してから約30年の歴史を記した。
 - *ルカは、どういう目的をもってこの書を書いたのか。

2. アウトライン: 使徒の働きの執筆目的

- I. パウロの使徒職の擁護
- II. パウロの無罪性の証明
- III. キリスト教の普遍性の証明
- IV. キリスト教発展の歴史の提示
- V. 終末的希望の告白
- VI. 神の主権の確認

結論: 私たちへの適用

使徒の働きについて学ぶ。

I. パウロの使徒職の擁護

1. パウロの使徒職を疑う者たちがいた。

(1) 1コリ 9:1

1Co 9:1 私には自由がないのですか。私は使徒ではないのですか。私は私たちの主イエスを見なかったのですか。あなたがたは、主にあつて私の働きの実ではありませんか。

- (2) パウロの回心体験の記録が、3度出てくる。

*使 9:1~43、22:1~30、26:1~32

2. ペテロとパウロの驚くべき対比が書かれている。

(1) 生まれつき足の悪い人の癒し

*使3:1~11、14:8~18

(2) ペテロの影、パウロの手ぬぐいや前掛け

*使5:15~16、19:11~12

(3) ユダヤ人たちにねたみを起させた。

*使5:17、13:45

(4) 魔術師シモン、魔術師バル・イエス

*使8:9~24、13:6~11

(5) ドルカスの蘇生、ユテコという青年の蘇生

*使9:36~41、20:9~12

II. パウロの無罪性の証明

1. 政治権力に対して、パウロの無罪証明をする必要があった。

(1) パウロはローマで獄中生活を送り、裁判の時を待っていた。

①これは、キリスト教の無罪証明の試みでもある。

(2) 使徒の働きに記録されている迫害は、2つの例外を除いて、宗教的なもの。

①そのほとんどが、ユダヤ教からの迫害である。

②2つの例外とは、ピリピでの迫害とエペソでの迫害である。

(3) ピリピでの迫害(使16:12~40)

①占いの霊につかれた若い女奴隷を解放した。

②金儲けの望みがなくなったので、彼女の主人たちから訴えられた。

③パウロがローマ帝国の権威に反抗したわけではない。

(4) エペソでの迫害(使19:23~41)

①銀細工人デメテリオが暴走を煽動した。

②町の書記官が、騒ぎを静めた。

III. キリスト教の普遍性の証明

1. 福音の伝達

(1) 人種的広がり

- ① サマリア人、改宗者(エチオピア人の宦官)、異邦人(コルネリオ)
- ② アンテオケ教会の誕生

(2) エルサレム教会による認定

- ① エルサレム会議(使15章)
- ② 異邦人は、恵みと信仰によって救われることを認定した。
- ③ 異邦人は、ユダヤ教に改宗しなくてもよい。

(3) 福音は、あらゆる人たちに伝わって行った。

- ① 老若男女の区別なく。
- ② 貧富の差に関係なく。
- ③ 身分の差に関係なく。

IV. キリスト教発展の歴史の提示

1. 地理的広がり

(1) 使1:8

Act 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

- ① エルサレム、ユダヤ、サマリア、地の果て
- ② キリスト教は、30年間でエルサレムからローマまで伝わった。

2. 教会成長報告

(1) 7回出て来る。

- ① 使2:47、6:7、9:31、12:24、16:5、19:20、28:30~31

(2) ローマ世界の境界の地パレスチナから、首都ローマまで、福音が伝わった。

- ① ペテロからパウロへの移行が必要であった。
- ② ユダヤ人伝道から異邦人伝道への移行が必要であった。

(3) ルカは、ルカの福音書の続編に当たる歴史書を書いたのである。

V. 終末的希望の告白

1. この歴史書には、神学的要素がたっぷり含まれている。

(1) 救済論

①ユダヤ人も異邦人も、同じ福音によって救われる。

2. 特に重要なのは、終末論である。

(1) 使徒の働きの中には、「神の国」(御国)という言葉が8回出て来る。

①ルカの福音書には30回以上出て来る。

(2) 使1:6

Act 1:6 そこで使徒たちは、一緒に集まったとき、イエスに尋ねた。「主よ。イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」

①「国」とはギリシア語で「バシレイア」であり、「kingdom」である。

②弟子たちは、メシア的王国の成就に関する質問をしているのである。

(3) 使28:30~31

Act 28:30 パウロは、まる二年間、自費で借りた家に住み、訪ねて来る人たちをみな迎えて、

Act 28:31 少しもはばかりことなく、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

①使徒の働きは、パウロが異邦人に神の国を宣べ伝えているところで終わる。

3. 教会は、メシア的王国の相続人である。

(1) 御国の福音は、ユダヤ人から異邦人に伝わった。

①エルサレムからローマに伝わった。

(2) メシア的王国の約束は、ユダヤ的希望である。

①今や、異邦人もメシア的王国の約束の受取人となった。

②メシア的王国とは、メシアの再臨の後に地上に成就する王国である。

*文字通りの物理的な国である。

*王なるキリストが、エルサレムから統治される。

VI. 神の主権の確認

1. キリスト教の広がりには、神の主権によって導かれたものである。

(1) 迫害は、宣教の広がりには貢献した。

①サマリア人伝道と異邦人伝道は、迫害によって散らされなければ起こらなかった。

(2) パウロの伝道旅行を導いたのは、三位一体の神である。

- ①第二次伝道旅行でパウロがヨーロッパ大陸に渡ったのは、神の導きによる。
- ②これで、福音が西回りで世界中に伝達されることが決まった。

(3) 神は今何をしておられるのか。

①使 15 : 17

Act 15:17 それは、人々のうちの残りの者と／わたしの名で呼ばれるすべての異邦人が、
／主を求めるようになるためだ。

②神は、「主の御名で呼ばれる異邦人」を呼び集めておられる。

結論：私たちへの適用

1. ルカが伝えようとしてことを理解しよう。
 - (1) 初期の教会の歴史
 - (2) 初期の信者たちの信仰
 - (3) 神の計画と神の主権

2. 初期の信者たちの信仰から学ぼう。
 - (1) 彼らの確信
 - (2) 彼らの献身
 - (3) 彼らの希望

3. 現代の『使徒の働き』を書き継ごう。
 - (1) 終末論的希望(再臨とメシア的王国)
 - (2) 神の主権
 - (3) 「主の御名で呼ばれる異邦人」を呼び集めよう。

60分でわかる新約聖書(6) 「ローマ人への手紙」

1. はじめに

(1) ローマ人への手紙の位置づけ

- ①最初の組織神学の書
- ②これは、自分が設立していない教会に宛てたパウロの唯一の手紙である。
- ③執筆時点では、まだ訪問すらしていない。
- ④使28章になってようやく、囚人としてローマを訪問するようになる。

(2) 著者は使徒パウロ。

- ①小アジアのタルソで生れたユダヤ人で、ローマの市民権を持っていた。
- ②教会迫害の張本人であったが、ダマスコ途上で回心を経験した(9:1~9)。

(3) 宛先はローマの教会。

①使1:7

Rom 1:7 ローマにいるすべての、神に愛され、召された聖徒たちへ。／私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

- ②ローマの教会は、幾つかの家の教会から成り立っていた。
*ペンテコステの日に回心したユダヤ人が、ローマに戻って伝道した。
- ③この手紙執筆当時、異邦人信者が大半を占めるようになっていた。
*ユダヤ人信者と異邦人信者の関係は、重要な神学的問題である。

(4) 執筆年代

- ①57年頃に書かれたと思われる。
- ②第三次伝道旅行の終りごろ
*コリント滞在中(使20:2~3)
*エルサレムに諸教会の献金を届ける直前
- ③第3次伝道旅行はエルサレムで終わる。
*そこで投獄され、ローマに送られた。
- ④60年にローマに到着(使28:11~15)。

(5) 執筆目的

- ①自らの神学をまとめるため
- ②スペイン伝道の支援を求めるため
- ③ローマ教会の中にあつたユダヤ人信者と異邦人信者の葛藤を解決するため
*ロマ14:1~15:13は、そのような視点から読む必要がある。

2. アウトライン：10の質問

- (1) 福音とは何か(1:1~17)
- (2) 人はなぜ福音を必要としているのか(1:18~3:20)
- (3) 罪人は、どのようにして義とされるのか(3:21~31)
- (4) 福音は、旧約聖書と調和しているのか(4:1~25)
- (5) 義認は、どのような祝福をもたらすのか(5:1~21)
- (6) 恵みと信仰による救いは、罪の生活を助長するのか(6:1~23)
- (7) 信者はなぜ、律法主義に陥るのか(7:1~25)
- (8) 信者は、どのようにして清い生活を送ることができるのか(8:1~39)
- (9) ユダヤ人は、神から見捨てられたのか(9:1~11:36)
- (10) では、いかに生きるべきか(12:1~16:27)

ローマ人への手紙について学ぶ。

I. 福音とは何か(1:1~17)

1. 神の御子(第二位格の神)に関するものである。
 - (1) 福音は、天地創造の前から約束されていた。
 - ①御子の永遠性と神性を教えている。
 - (2) 肉によればダビデの子孫として生まれた。
 - ①イエスの人性を教えている。
 - ②永遠なるお方が有限な時間と空間の中に誕生された。
 - ③死者の中からの復活により、公に神の御子として示された。
2. 福音の3要素
 - (1) イエスは私たちの罪のために十字架で死なれた。
 - (2) 墓に葬られた。
 - (3) 3日目に復活された。

II. 人はなぜ福音を必要としているのか(1:18~3:20)

1. 異邦人は、罪人である(1:18~2:16)。
 - (1) 聖書を持たない人にも啓示が与えられている。
 - ①被造世界を通して、神についての知識を得ることができる。
 - ②程度の差はあるが、すべての人にある程度の啓示が与えられている。

③人間は神の「かたち」に創造されているので、神を認識する能力がある。

④それゆえ、彼らに弁解の余地はない。

⑤人間は、意図的に真理を押しつけている。だから、弁解の余地はない。

④ロマ1:21~23

Rom 1:21 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。

Rom 1:22 彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、

Rom 1:23 朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。

2. ユダヤ人も、罪人である(2:17~3:8)。

(1) ユダヤ人には、言行不一致の罪がある(2:17~24)。

①人を教えながら、自分自身を教えない。

(2) 割礼を誇りとしているが、割礼は祝福の保証ではない(2:25~29)。

①割礼を受けた者が律法に背いているなら、無割礼になったのと同じである。

3. すべての人は、罪人である(3:9~20)。

(1) ロマ3:9~10

Rom 3:9 では、どうなのでしょう。私たちにすぐれているところはあるのでしょうか。全くありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです。

Rom 3:10 次のように書いてあるとおりです。／「義人はいない。一人もいない。」

Ⅲ. 罪人は、どのようにして義とされるのか(3:21~31)

1. 「義とされること」「義と認められること」を、義認という。

(1) 私たちの本質が「義」となることではない。

①これは、転嫁された義である。

②キリストの義が信じる者に転嫁される。

2. 神の義は、イエス・キリストを信じる信仰によって得られる。

(1) 人は、信仰によって救われる。これを信仰義認という。

①「信仰のみ」、「聖書のみ」、「万人祭司」は、宗教改革の三大原理である。

②神は、信じた者を「義」と宣言される。

3. すべての人は、なんの差別もなしに同じ方法で救われる。

(1) ユダヤ人も異邦人と同じ方法で救われる。

①ロマ3:22~24

Rom 3:22 すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。

Rom 3:23 すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、

Rom 3:24 神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。

IV. 福音は、旧約聖書と調和しているのか(4:1~25)

1. 信仰義認は旧約聖書の教えか。

(1) アブラハムの場合

①アブラハムは、神の約束を信じたので義とされた。

*創15:5~6にある子孫の約束

(2) ダビデの場合

①ダビデは、姦淫と殺人の罪を犯したが、悔い改めによって赦された。

②彼は「律法の時代」の人であるが、信仰による義を証言している。

③詩32:1~2

Psa 32:1 幸いなことよ／その背きを赦され 罪をおおわれた人は。

Psa 32:2 幸いなことよ／【主】が咎をお認めにならず／その霊に欺きがない人は。

2. 義認と割礼の関係をどう考えたらよいのか。

(1) 割礼と義認とは無関係である。

①創15章：アブラハムは無割礼の時に、信仰によって義とされた。

②創17章：アブラハムは割礼を受けた。

③創15章と17章の間には、14年の歳月がある。

V. 義認は、どのような祝福をもたらすのか(5:1~21)

1. 義認の結果、信者には5つの祝福が与えられている。

(1) 神との平和(1節)

①ロマ5:1

Rom 5:1 こうして、私たちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

(2) 恵みへのアクセス(利用する権利) (2節 a)

- ①義認が恵みにより成就したように、信仰生活にも恵みが必要である。
- ②恵みへの道は、「オープン・ドア」の状態にある。
- ③いかなる不安や試練も、恵みによって乗り越えることができる。
- ④大祭司であるキリストに近づくことができる。

(3) 栄光の希望に関する誇り (2節 b)

- ①クリスチャンの希望は、聖化の完成である。これを栄化という。
- ②恵みにより義とされ、聖化され、栄化される。
- ③霊的指導者の役割は、霊的幼子に「恵みへのアクセス」を教えることである。

(4) 今の時の忍耐心 (3~10節)

- ①義認の恵みを受けた者は、誰もが嫌がる苦難(患難)をも誇りとしている。
- ②患難は、私たちの内にキリストの似姿を作り出す原動力となる。
- ③ロマ5:3~4

Rom 5:3 それだけではなく、苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、

Rom 5:4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。

(5) 神に関する誇り (11節)

- ①ロマ5:11

Rom 5:11 それだけではなく、私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を喜んでいます。キリストによって、今や、私たちは和解させていただいたのです。

VI. 恵みと信仰による救いは、罪の生活を助長するのか (6:1~23)

1. 私たちはすでに死んだ。

(1) 罪に対して死んだ。

- ①死んだ人は罪の影響を受けないことはない。

(2) 死んだと言える理由は、信仰によってキリストと一体化したから。

- ①キリストは、十字架について死んだ。私たちも死んだ。
- ②キリストは、墓に葬られた。私たちも葬られた。
- ③キリストは、復活した。私たちも復活した。

2. 私たちはキリスト・イエスにあって生きた者である。

(1) ロマ6:11

Rom 6:11 同じように、あなたがたもキリスト・イエスにあって、自分は罪に対して死んだ者であり、神に対して生きている者だと、認めなさい。

VII. 信者はなぜ、律法主義に陥るのか(7:1~25)

1. 信者の最大の悲劇は、律法を行うことによって聖化を達成しようとする事である。

(1) ロマ書7章クリスチャン

- ①律法を行おうとする結果、律法主義的生活に追い込まれる。
- ②本来良いものであるはずの律法が、死をもたらすようになる。
- ③律法が、罪の性質が動き始めるための土台となるからである。

(2) パウロの体験

- ①ロマ書7章で、「私」という一人称が、9回使われている。
- ②自分の体験を基に、普遍的真理を述べている。

VIII. 信者は、どのようにして清い生活を送ることができるのか(8:1~39)

1. 肉的信者と霊的信者の違い

(1) 肉的信者は、ロマ書7章クリスチャンである。

- ①彼らは、自分で自分に重荷を課しているので、苦しむのは当然である。

(2) 霊的信者は、ロマ書8章クリスチャンである。

- ①彼らは、新しい原理に従って歩む。

2. 「キリスト・イエスにある、いのちの御霊の律法」

(1) 信者は、キリストと一体化した。

- ①神は私たちに、武器なしで戦えとは命じておられない。

②ロマ8:2

Rom 8:2 なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、罪と死の律法からあなたを解放したからです。

③ヨハ15:5

Joh 15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。

(2) 信者は、苦難の中にあっても、圧倒的な勝利者となる。

- ①「苦難の中にあっても」
- ②「私たちが愛してくださった方によって」
- ③「圧倒的な勝利者となる」

IX. ユダヤ人は、神から見捨てられたのか(9:1~11:36)

1. ロマ書9~11章の扱いについて3つの立場がある。

(1) 無視する立場

- ①置換神学の立場。教会は新しいイスラエルであると考える。

(2) 軽視する立場

- ①この部分は挿入句的なもので、深い神学的意味はない。

(3) 重視する立場

- ①神は、イスラエルに対する計画を持っておられる。

2. ロマ書9~11章は、「イスラエル人に関する神の義」の弁護である。

(1) 本来ならば、「神の義の適用」(12~15章)に進むはずである。

- ①ここでパウロは、当然の疑問に答えようとしている。
- ②イスラエル人に対する神の愛は、どうなったのか。

(2) 神の人類救済計画のステップ

- ①イスラエルの大半がメシアを拒否する。
- ②その結果、救いが異邦人に行く。
- ③イスラエルがねたみを起こし、やがて民族的救いを経験する。
- ④異邦人信者の使命は、ユダヤ人に「ねたみ」を起こさせることである。

(3) オリーブの木のたとえ

- ①折られた栽培種の枝とは、不信仰のイスラエル人。
- ②接ぎ木された野生種の枝とは、異邦人信者。
- ③この木(根の豊かな養分)は、霊的祝福の源である。
 - *これは、アブラハム契約のことである。
 - *アブラハム契約は、神がイスラエルと結んだ契約である。
 - *異邦人は、アブラハム契約の祝福に接ぎ木されたのである。

X. では、いかに生きるべきか（12：1～16：27）

1. 神学のない実践はない。また、実践のない神学もない。

(1) パウロ書簡の特徴は、教理、そして、適用である。

- ①1～8章が教理
- ②9～11章がイスラエルの救い
- ③12～16章が適用

(2) ロマ12：1～2が、実践の基本原則である。

Rom 12:1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。

Rom 12:2 この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。

(3) 否定形の命令の内容

- ①否定的命令形の要点は、「この時代」の要求に同意しないということ。
- ②「この時代は、あなたを『型』にはめようとするが、同意してはならない」

(4) 肯定形の命令の内容

- ①「心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい」
- ②受動態命令形：動作の主体は自分以外である。
- ③神が主体の場合、「divine passive」（神的受動態）という言葉がある。
- ④聖化は「divine passive」（神的受動態）の結果起こる祝福である。

60分でわかる新約聖書(7) 「コリント人への手紙第一」

1. はじめに

(1) コリント人への手紙第一の位置づけ

- ①エペソ書は、普遍的教会に関する教えが書かれた書簡である。
- ②1コリは、地域教会が直面する課題について書かれた書簡である。

(2) 著者は使徒パウロ。

- ①彼は2度、自己紹介をしている(1:1、16:21)。
- ②4回自分のことを「使徒」と呼んでいる(1:1、4:9、9:1、15:9)。

(3) 宛先はコリントの教会。

- ①コリントは、アカヤ州の首都で、東西に移動するための要衝の地である。
- ②ローマ帝国内で4番目に大きな町。
 - *商業都市、文化都市、墮落した都市、偶像礼拝の都市
 - *「korinthiazomai」とい動詞が生まれたほどである(墮落した生活)。
- ③この教会の土台を築いたのはパウロであるが、多くの問題があった。

(4) 執筆年代

- ①パウロは、紀元55年頃に、エペソにあってこの手紙を書いた。

(5) 執筆目的

- ①パウロは、位置的聖化を、実際の聖化に高めようと努力した。
- ②1コリ1:1~3

1Co 1:1 神のみこころによりキリスト・イエスの使徒として召されたパウロと、兄弟ソステネから、

1Co 1:2 コリントにある神の教会へ。すなわち、いたるところで私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人とともに、キリスト・イエスにあって聖なる者とされ、聖徒として召された方々へ。主はそのすべての人の主であり、私たちの主です。

1Co 1:3 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

*彼らは、数々の問題を抱えながらも、「聖徒」と呼ばれている。

2. アウトライン:

イントロダクション(1:1~9)

I. 罪の叱責

1. 教会の中にある分裂(1:10~4:21)
 2. 罪に対する懲戒(5:1~13)
 3. 裁判の問題(6:1~8)
 4. 性的放縱の問題(6:9~20)
- II. 質問に対する回答
5. 結婚(7:1~40)
 6. 偶像に捧げた肉(8:1~11:1)
 7. 礼拝における秩序(11:2~34)
 8. 聖霊の賜物(12:1~14:40)
 9. 復活(15:1~58)
 10. 献金(16:1~12)
- 最後のあいさつ(16:13~24)

コリント人への手紙第一について学ぶ。

I. 罪の叱責

1. 教会の中にある分裂(1:10~4:21)

(1) 1コリ1:11~12

1Co 1:11 私の兄弟たち。実は、あなたがたの間に争いがあると、クロエの家の者から知らされました。

1Co 1:12 あなたがたはそれぞれ、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」と言っているとのこと。

①教会の中は、4派に分裂していた。

- *パウロ派(異邦人伝道派)
- *アポロ派(雄弁に惹かれる人たち)
- *ペテロ派(ユダヤ人伝道派)
- *キリスト派(優越感を覚える人たち)

(2) 1コリ1:18

1Co 1:18 十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。

- ①神が愚かな者、弱い者を選ばれたのは、知恵ある者、強い者はずかしめるため。
- ②分派があるのは、「肉に属する人」が多くいるからである。
- ③キリストという土台の上に自分の人生を建てるべきである。
- ④また、使徒たちの謙遜な姿勢から学ぶべきである。
- ⑤パウロは、「一致して、同じ心、同じ判断」を保つように勧める。

2. 罪に対する懲戒(5:1~13)

- (1) 義理の母を妻にしている者がいる(異邦人が聞いても驚くような罪)。
- ①レビ記18:8、申命記22:30などは、これを禁止している。
 - ②パウロは、霊においては、主イエスの御名によってその人をすでに裁いた。
 - *主イエスの権能によって、その人をサタンに引き渡した。
 - *その人が悔い改めに至ることを願って、これを行なっている。
- (2) 罪の処理をしないのは、高慢になっているからである。
- ①高慢というパン種がわずかでもあれば、教会全体に影響を与える。
 - ②過越の祭りでは、小羊をほふった後、種が入っていないパンを食べる。
 - ③すでに過越の小羊であるキリストがほふられた。
 - ④新約時代の信者も、パン種のない状態で、神を礼拝すべきである。
- (3) 不品行の罪の処理に関するパウロの教え
- ①教会外の人たちのことは、神が裁かれるので神に委ねておけばよい。
 - ②教会内の罪の問題に関しては、そのまま放置しておいてはならない。
 - ③悔い改めを迫り、もし悔い改めないなら、その人を教会から取り除く必要がある。

3. 裁判の問題(6:1~8)

- (1) コリント教会の中には、同信の兄弟たちを裁判所に訴える者たちがいた。
- ①刑事事件の場合は、ローマの法律で裁かれるのが妥当である(ローマ13章)。
 - ②民事事件では、ユダヤ人にはユダヤ法による裁判が認められていた。
 - ③ラビの教えでは、ユダヤ人の訴訟を異邦人の裁判所に持ち込むのは罪。
- (2) しかし、クリスチャン同士の訴訟は、教会内で解決すべきである。
- ①聖徒は、再臨の時には世界を裁く地位に就く(ローマ8:17、黙示20:4参照)。
 - ②それなのに、ごく小さな事件さえ裁く力がないというのはおかしいことである。
 - ③神を知らない人たちを、自らの裁判官に選ぶのはおかしいことである。
 - ④訴え合うよりは、むしろ不正を甘んじて受けた方がよい。
- (3) 不信者との争いに関しては、この世の法廷に持ち込むべきである。
- ①その方が、不信者である相手にとってより公正な方法となるからである。

4. 性的放縦の問題(6:9~20)

- (1) クリスチャンの自由を誤解している人たちがいた。
- 「食物や体はやがて消え去るものであるから、それらに関しては何をしても構わない。」

それが、魂や霊に影響を与えることはない」

(2) パウロの反論

- ①クリスチャンの体はキリストのからだの一部である。
- ②その体を取って、遊女と交わるなら、その人は遊女と一心同体となる。
- ③人が犯す罪はすべて体の外のものだが、不品行は自分の体に対する罪である。
- ④信者の体は、聖霊の宮である。その宮を遊女の体とすることは重大な罪である。

II. 質問に対する回答

5. 結婚(7:1~40)

(1) 信者の結婚関係

- ①結婚した者は、互いに相手に対して果たすべき義務がある。
- ②祈りのために合意の上でしばらく肉体関係を控えるのは構わない。

(2) 独身男性とやもめの女

- ①自分のように独身で生活できるなら、それが良い(神への献身)。
- ②もし自制することができないなら、結婚したほうがよい。

(3) 離婚

- ①原則は、離婚はいけないということである。
- ②すでに離婚しているなら、結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか。
- ③結婚後、片方が信者になった場合は、どうするか。
 - * 不信者の相手がそれを承知している場合は、離婚してはならない。
 - * もし不信者の相手が離れていく場合は、そのままにしておいてよい。

(4) 処女

- ①今は「危急のとき」であるから、今の状態を変えないで生活するほうがよい。
- ②「危急のとき」とは、伝道できる時間が少ししか残されていないという意味。
- ③男であれ女であれ、独身の時のほうが、神に対して関心を集中しやすい。

(5) 配偶者と死別した人

- ①相手が死ねば、生きている方はその結婚から解かれる。
- ②再婚の自由を行使することは罪ではないが、再婚しない方がもっと幸いである。

6. 偶像に捧げた肉(8:1~11:1)

- (1) 偶像に捧げた肉を食べてもよいのかどうか。

- ①市場では偶像に捧げられた肉が売られており、普通の肉と区別がつかない。
- ②パウロは、知識と愛を対比させて論じる。
 - *偶像なるものは実際には存在しないので、肉が霊的に汚れるわけではない。
 - *しかし、知識は、愛の衣をまもっていなければ、有害なものとなる。
- ③偶像神は存在しないが、人々を偶像礼拝に導く悪霊は存在する。

(2) 「弱い人々」への配慮が必要である。

- ①配慮のないままで食べるなら、信仰の弱い人をつまずかせることになる。
- ②その兄弟のために死んでくださったキリストに対して罪を犯すことになる。
- ③「愛による自由の制限」
 - *クリスチャンには自由があるが、すべてのことが有益とは限らない。
 - *また、すべてのことが人の徳を高めるとは限らない。
 - *究極の原則は、自分の利益ではなく、他人の利益を求めることである。

7. 礼拝における秩序(11:2~34)

(1) 婦人のかぶり物が、礼拝の秩序を壊していた。

- ①「かぶり物」なしに出歩くのは、道徳的に問題のある女性のすることだった。
- ②ギリシア人の婦人たちは、「かぶり物」をつけない習慣があった。
- ③キリスト者の自由を盾に、ギリシア風の習慣を教会に持ち込む婦人たちがいた。
- ④「婦人のかぶり物」の問題は、結局は礼拝の秩序の問題である。
- ⑤字義通りに実行すべしという意見と、文化的な命令であるという意見がある。
- ⑥キリスト者の自由は、人の徳を高め、教会を建て上げるために用いるべきである。

(2) 主の晩餐における混乱があった。

- ①当時は、聖餐式の前に食事会があった。ギリシア語で「アガペ(愛餐)」と言う。
- ②裕福な者たちは、豪華な料理を持ってきて、全員が揃う前に勝手に食べていた。
- ③これは、貧者への侮辱であり、教会内に分派を作り出す原因となっていた。
- ④パウロは、以下のように提案した。
 - *主イエスのことばを思い出すこと。
 - *主の晩餐にあずかるために、十分な準備をすること。
 - *全員が集まるまで待つこと。空腹な場合は、家で食べること。

8. 聖霊の賜物(12:1~14:40)

- (1) 聖霊の導きがなければ、「イエスは主なり」と言えない。
- (2) コリントの教会にあったのは、異言の賜物の強調から来る混乱であった。
 - ①それを矯正するために、パウロは次の3点を明らかにする。

*教会には多様な賜物、奉仕、働きがある。

*賜物を分け与える方は、同じ御霊であり、同じ主である(多様性の中の一致)。

*これらの賜物は、教会全体の益となるために各人に与えられている。

②愛がなければ、すべては空しい(13章は愛の章である)。

9. 復活(15:1~58)

(1) パウロが宣べ伝えた福音

①キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれた。

②またキリストは、墓に葬られた。

③そして、3日目に死者の中から甦られた。

(2) 復活の目撃者

①復活のキリストは、まずケパ(ペテロ)に、それから十二弟子に現れた。

②次に、500人以上の兄弟たちに現れた。大多数の者はまだ生き残っていた。

③さらに、ヤコブに現れ、それから使徒たち全部に現れた。

④最後に、教会を迫害していた自分にも現れてくださった。

(3) キリストは、「眠った者の初穂として死者の中からよみがえった」。

①キリストの復活に続く信者の復活は、キリストの再臨の時に起こる。

②それに続いて、キリストの支配が実現する(地上における千年王国の実現)。

③千年王国の終わりに、死も滅ぼされ、キリストは御国を父なる神にお渡しになる。

10. 献金(16:1~12)

(1) パウロは、エルサレム教会への支援を深く心に留めていた。

①エルサレムの聖徒たちを支援する3つの理由

*貧しい兄弟たちを支えるのは、兄弟愛の実践である。

*この献金は、両者がキリストにあって一つであることを示す行為である。

*異邦人信者がユダヤ人信者を支援するのは当然の義務である。

②ロマ15:27

Rom 15:27 彼らは喜んでそうすることにしましたが、聖徒たちに対してそうする義務もあります。異邦人は彼らの霊的なものにあずかったのですから、物質的なもので彼らに奉仕すべきです。

まとめ

パウロは、一致と調和を求め、情熱を燃やし、愛を抱きつつ、この手紙を書いた。

「一致と調和」、「情熱」、そして「愛」を抱きつつ、地上生涯を歩ませていただく。

60分でわかる新約聖書(8) 「コリント人への手紙第二」

1. はじめに

(1) コリント人への手紙第二の位置づけ

- ①コリント書は、地域教会が直面する課題について書かれた書簡である。
 - *コリント人への手紙第一では、パウロは教師である。
 - *コリント人への手紙第二では、パウロは牧会者である。
- ②コリント人への手紙第二は、さほど注目されない(難解な箇所が多い)。
 - *皮肉的な言葉が多いが、その判断が難しい。
 - *個人的な感情を伝える言葉が多い。

(2) 2つのコリント書執筆の経緯

- ①パウロは、第二次伝道旅行でコリントを訪問した(使18章)。
- ②コリントでは、アクラとプリスカ夫婦とともに天幕作りとして働いた。
- ③シラスとテモテがマケドニアから来て合流した。
- ④パウロは、伝道に専念することが出来た。
- ⑤夜の幻によって励まされたパウロは、1年半の間コリントに留まった。
- ⑥ユダヤ人たちが反抗したので、パウロは異邦人伝道に向った。
- ⑦多くの人たちが救われたので、ユダヤ人の指導者たちはパウロを訴えた。
- ⑧アカヤの総督ガリオは、訴えを却下した。
- ⑨その後パウロは、ケンクレアの港からエペソ、アンテオケに向った。
- ⑩第三次伝道旅行で、パウロはエペソに戻り、そこに2年間留まった。
- ⑪エペソに滞在中、コリント教会から使いが来て、パウロの助言を求めた。
- ⑫彼らの疑問に答えるために書かれたのが、コリント人への手紙第一である。
- ⑬後にパウロは、この手紙に対する反応が気になりになった。
 - *特に、罪を犯したメンバーの懲戒の問題
- ⑭そこでパウロは、テトスに会うためにトロアスに行ったが、会えなかった。
- ⑮次にパウロはマケドニアに渡り、そこでテトスに会うことができた。
- ⑯テトスは、コリント教会の情報を持っていた。
 - *グッドニュース：罪を犯した人は霊的に回復した。
 - *残念なニュース：エルサレムの貧しい聖徒たちに献金を送っていない。
 - *バッドニュース：偽教師たちが、パウロの使徒職を否定している。
- ⑰そこでパウロは、マケドニアでコリント人への手紙第二を書いた。

(3) 執筆年代

- ①コリント人への手紙第一は、紀元55年頃に、エペソで書かれた。

②第二は、紀元57年頃に、マケドニア(恐らくピリピ)で書かれた。

2. 執筆目的(これがアウトラインとなる)

- I. コリント訪問の計画を変更した理由(1:15~22)
- II. 懲戒を正しく実行したことへの褒め言葉(2:6~11)
- III. パウロの動機を疑う者たちへの応答(4:1~2)
- IV. エルサレムの聖徒たちへの献金(8~9章)
- V. パウロの使徒職を疑う者たちへの応答(10~12章)

コリント人への手紙第二について学ぶ。

I. コリント訪問の計画を変更した理由(1:15~22)

1. 最初の計画の変更

- (1) 1コリ16:5~6

1Co16:5 私はマケドニアを通して、あなたがたのところへ行きます。マケドニアはただ通過し、

1Co16:6 おそらく、あなたがたのところに滞在するでしょう。冬を越すことになるかもしれませんが。どこに向かうにしても、あなたがたに送り出してもらうためです。

①ところがパウロは、計画を変更した。

2. パウロの計画は、「しかり」と「否」を含んだ裏表のあるものではない。

- (1) 彼が宣べ伝えた福音は、「しかり」と「否」を同時に含んだものではない。

①真実な宣教内容を見れば、パウロが真実な人間であることは明らかである。

②パウロが訪問を延期しているのは、思いやりのためである(1:23)。

2Co1:23 私は自分のいのちをかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりからです。

- (2) 神の約束はキリストにおいて「しかり」となった。

①すでに成就した預言も、将来成就する預言も、すべてキリストにおいて成就する。

II. 懲戒を正しく実行したことへの褒め言葉(2:6~11)

1. 「悲しみの手紙」(今は残っていない手紙)

- (1) パウロは、前の手紙で、不品行な者を処罰するように命じた。

①「父の妻を妻にしている者」(1コリ5:1~13)がいた。

②パウロが厳しい処罰を命じた目的

*教会がパウロの教えに従順になるかどうかを試すため

*その不品行な者の魂を滅びから回復するため

2. 教会は処罰を実行し、その人が悔い改めた。

(1) そこでパウロは、赦しの実践を勧める。

- ①深い悲しみに耐え切れずに信仰の崩壊に追い込まれことがないため。
- ②処罰が厳しすぎたり、長すぎたりすると、信仰を放棄する可能性がある。
- ③パウロ自身もまた、教会とともにその人を赦す用意ができています。
- ④その赦しは、裁き主であるキリストの御前での赦しである。

(2) サタンの策略(2コリ2:11)

2Co 2:11 それは、私たちがサタンに乗じられないようにするためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。

- ①サタンは、光の天使に変装する(2コリト11:14)。
- ②罪に対する厳しさと、悔い改めた人を赦すという恵みの側面
- ③サタンの策略とは、「罪に対する厳しさ」だけを主張することである。
- ④サタンは良いことを主張することで、結果として、自分の願望を達成する。

III. パウロの動機を疑う者たちへの応答(4:1~2)

1. 使徒としてのパウロの姿勢

2Co 4:1 こういうわけで、私たちは、あわれみを受けてこの務めについているので、落胆することがありません。

2Co 4:2 かえって、恥となるような隠し事を捨て、ずる賢い歩みをせず、神のことばを曲げず、真理を明らかにすることで、神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦しています。

(1) パウロには、新しい契約に仕える務めに召されたという認識があった。

- ①彼は、恥ずべき隠されたことを捨てている。
- ②彼は、悪巧みに歩むことがない。
- ③彼は、神のことばを曲げないで語っている。
- ④彼は、真理を明らかにしようとしている。
- ⑤彼は、神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦している。

2. 人々が救われない理由

(1) 人々が救われないのは、伝える側の問題ではなく、聞く側の問題である。

- ①彼らには、霊的な覆いがかけられているので、福音が理解できないのである。
- ②それは、この世の神(サタン)によって心の眼をくらませられた状態である。
- ③そのために、キリストの福音が放つ栄光の光が彼らの心に届かない。

- ④天地創造の時に、闇の中から光が輝き出るようにされた神は、パウロの心にも同じことをしてくださった。その結果、パウロの心にキリストを知る知識の輝きが与えられた。
- ⑤それゆえ、パウロに誇るものはないし、自分の偉さを宣べ伝える必要もない。
- ⑥パウロの願いは、人々に仕え、キリストを宣べ伝えることだけである。

IV. エルサレムの聖徒たちへの献金(8~9章)

1. 当時パウロは、エルサレム教会を助けるために、異邦人信者からの献金を集める計画を実行中であった。

(1) 先ず、マケドニアの諸教会の献金に対する姿勢が素晴らしいことを伝える。

- ①彼らは、激しい試練と極度の貧しさの中から、惜しみなく捧げた。
- ②彼らは、自ら進んで、力以上に捧げました。

(2) 献金を捧げるのは、恵みによる。

- ①コリントの信者たちは、信仰にも、ことばにも、知識にも、熱心にも、愛にも富んでいた。
- ②これらの点で富んでいるというのは、神の恵みがあったからである。
- ③「この恵みのわざ(献金)にも富むようになってください」と勧めている。
- ④献金を捧げるのも、「恵みによるのだ」ということを教えられる。

(3) 第3のこととして、主イエス・キリストの姿を思い起こさせている。

- ①主は富んでおられたが、私たちのために貧しくなられた。
- ②それは私たちが、キリストの貧しさによって富む者となるためである。
- ③つまり、キリストの犠牲によって罪が赦され、神の子とされるということ。
- ④パウロは、献金の原点はキリストの中に見出されると教えている。
- ⑤コリントの信者がエルサレムの信者の欠乏を補うなら、彼らの余裕が逆にコリントの信者の欠乏を補うことになる。

*エルサレムの信者が持っている余裕とは、霊的なものである。

⑥ロマ 15:27

Rom 15:27 彼らは喜んでそうすることにしたのですが、聖徒たちに対してそうする義務もあります。異邦人は彼らの霊的なものにあずかったのですから、物質的なもので彼らに奉仕すべきです。

V. パウロの使徒職を疑う者たちへの応答(10~12章)

1. パウロの権威を軽んじる者たちへの反論

(1) 「パウロは面と向かうと弱気だが、遠く離れて書く手紙では強気だ」

- ①パウロの願いは、訪問する際には、強気にふるまわなくてもよいように。
- ②つまり、コリントの信者たちが悔い改めと従順に至ってくれるように。

(2) 真の悔い改めがないなら、パウロが取るべき行動は非常に厳しいものになる。

- ①コリントの信者たちを完全にキリストに服従させる。
- ②彼らの従順が完全になる時、あらゆる不従順を罰する。
- ③働き人が主の権威によって立てられているなら、その働き人に従うことは主に従うことである。

2. 反対者との対比

(1) エルサレムから下って来たユダヤ人の偽教師たちの存在

- ①彼らは、パウロの権威を否定し、コリント教会をその支配下に置こうとした。
- ②パウロは、偽教師たちと自分を比較し、正しく判断するように迫っている。
- ③彼らは、自己推薦や、仲間内での比較によって、自分を誇ったりした。
- ④パウロは、自分はそのような愚かなことはしないと語っている。
- ⑤偽教師たちがコリントに乗り込んで来たのは、越権行為である。
- ⑥クリスチャンは、他の人の働きを自分の手柄にするようなことはしない。

3. 自分を売り込むパウロ

(1) パウロは、今まで否定してきた自己推薦を始める。

- ①パウロは、コリント教会の信仰の回復のために、あえてそれを行う。
- ②彼は、愚かさをこらえてほしいと願う。
- ③パウロは、偽教師たちに対抗するために、皮肉たっぷりに、自分は「あの大使徒たち(十二使徒たち)」に少しも劣るところはないと語る。

(2) 無報酬の奉仕

- ①当時、哲学の教師たちは、報酬を得て教えるのが常識であった。
- ②ところがパウロは、天幕作りの仕事で生計を支えながら自給伝道をした。
- ③無報酬での働きが可能になったのは、他教会からの援助があったから。
- ④コリントで伝道する間、パウロの困窮を補ったのはマケドニアの諸教会であった(ピリ4:15参照)。
- ⑤今後もコリントの信者たちに経済的負担をかけないと表明する。
- ⑥パウロは、現に宣教活動をしている教会からは決して援助を受けないことを原則にしていた。偽教師たちの批判を封じるためである。

4. 自分を誇るパウロ

- (1) パウロは、気が進まないことをあえてしている。
- ①多くの敵対者たちが人間的誇りを語り、信者たちが影響を受けている。
 - ②パウロは、信者たちに気づかせるために、「誇る価値のないこと」を誇る。
 - ③コリントの信者は賢いので、自分の自慢話を喜んで我慢してくれるだろうと語っているが、これは、パウロ独特の皮肉である。
- (2) パウロは、使徒として、柔和と寛容をもって彼らに接してきた。
- ①ところが彼らは、そのパウロを「弱すぎる」と判断し、高圧的に出てくる偽使徒たちの教えに従っていた。
 - ②人を支配しようとするのは、本物の使徒がすべきことではない。
 - ③パウロは再び皮肉を込めて、「私たちは弱かったです」と書いている。
- (3) 民族的誇り
- ①「彼らはヘブル人ですか。私もそうです」
 - *ヘブル人とは、パレスチナ出身でヘブル語を話すユダヤ人のこと。
 - *ギリシア語を話すユダヤ人たちは、ヘレニストのユダヤ人と言われた。
 - ②「彼らはイスラエル人ですか。私もそうです」
 - ③「彼らはアブラハムの子孫ですか。私もそうです」
 - ④確かにパウロは、8日目に割礼を受けたユダヤ人でした(ピリピ3:5参照)。
- (4) キリストの僕としての証拠
- ①ここから「愚か者」の誇りでなく、「狂気した者」の叫びのようになる。
 - ②パウロは、キリストの僕としての弱さ、また労苦を数え上げている。
 - ③ルカが書いた「使徒の働き」は、パウロの伝道活動のほんの一部である。
- 2Co 11:23 彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうです。労苦したことはずっと多く、牢に入れられたこともずっと多く、むち打たれたことははるかに多く、死に直面したこともたびたびありました。
- 2Co 11:24 ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、
- 2Co 11:25 ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。
- 2Co 11:26 何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、異邦人から受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟による難にあい、
- 2Co 11:27 勞し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さの中に裸でいたこともありました。
- 2Co 11:28 ほかにもいろいろなことがあります、さらに、日々私に重荷となっている、すべての教会への心づかいがあります。

④主とともに苦難の道を歩んでいることこそ、キリストの僕の証拠である。

(5) 弱さを誇るパウロ

①「もし誇る必要があるなら、私は自分の弱さのことを誇ります」(30節)

②弱さの中に働く神の力と恵みとを証しすることで、御名をほめたたえる。

③14年前の自らの超自然的な体験を明らかにする。

*第3の天にあるパラダイスに引き上げられた。

*彼は、人間には語ることを許されていないことばを聞いた。

④その素晴らしい体験の直後に、「肉体に一つのとげ」が与えられた。

*目の病気、熱病、迫害、等々、さまざまな意見がある。

*ここはむしろ、明らかにされていないことに意味がある。

*「私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンのはたらきです」

⑤これを取ってくださいと、3度も主(キリスト)に願った。

⑥「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである」

(6) あの大使徒たち(エルサレムの十二使徒たち)との比較

①使徒のしるしは、彼らの間でなされた「あの奇蹟と不思議と力あるわざ」。

②超自然的な業全般を、3つの角度から見たものと考えたほうがよい。

③最後にパウロは、使徒としての特権を用いなかった(コリントの信徒たちに経済的負担をかけなかった)ことについて、謝っている。

④一方パウロは、主の働き人が霊の子供たちから経済的支援を受けるのは当然であると語っている(1コリ9:3~14)。

(7) コリントの信者たちは、偽教師の教えに従うか、パウロの教えに従うかの選択を迫られた。

①パウロは、次の訪問の予告を語る。

②コリントの信者たちを処罰するのは、パウロの本意ではない。

③彼が最も願ったのは、彼ら自身が信仰者として自己吟味をすることである。

④パウロは、彼らが信仰の歪みを矯正し、完全に正常な姿に立ち戻るようにと祈っている。

60分でわかる新約聖書(9) 「ガラテヤ人への手紙」

1. はじめに

(1) ガラテヤ人への手紙の位置づけ

- ①特定の教会や個人ではなく、ガラテヤ地方の複数の教会に宛てられたもの。
- ②2節に、「ガラテヤの諸教会」と書かれている。
- ③ガラテヤ地方とは、今のトルコである。
- ④パウロは、第1次伝道旅行でこの地方に複数の教会を設立した。
 - *ピシデヤのアンテオケ、イコニオム、ルステラ、デルベの諸教会
- ⑤パウロが設立した諸教会を、ユダヤ主義者と呼ばれる人々が訪問した。
 - *彼らは、誤った教えを説いて回った。
- ⑥ユダヤ主義者は、元パリサイ派で、律法を守ることに固執していた。
 - *彼らは自ら権威ある者のように振る舞っていた。
 - *しかし、エルサレム教会から承認を受けていたわけではない。
 - *エルサレム教会は、ユダヤ主義者の立場に反対していた。
- ⑦パウロは、ユダヤ主義者の教えに反論する必要を感じ、この書簡を書いた。
- ⑧恐らく、アンテオケで紀元48年頃に執筆したのであろう。
 - *タイミングは、エルサレム会議の前である。

(2) エルサレム会議(使徒15章)の内容

- ①エルサレムからアンテオケに下って来たユダヤ人の教師たちがいた。
- ②「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていた。彼らは、ユダヤ主義者である。
 - *救われるためには先ずユダヤ教に改宗する必要があるという教え。
 - *パウロの「人は信仰のみによって救われる」という教えとは異なる。
- ③そこで、エルサレム会議が開催された(使15章、紀元49年の初め)。
- ④キリスト教がユダヤ教の一派に留まるのか、普遍的な宗教になり得るのかを決する、非常に大事な会議であった。
- ⑤この会議の結果、人は信仰のみで救われるという福音の真理が確認された。
- ⑥異邦人信者には、ユダヤ人信者を配慮するようにとの勧告がなされた。
 - *「偶像に備えた物と、血と、絞め殺した物と、不品行を避けるように」

(3) ガラテヤ人への手紙の特徴

- ①ガラテヤ人への手紙は、ローマ人への手紙の短縮版である。
- ②ローマ人への手紙は、ガラテヤ人への手紙の拡大版である。
- ③宗教改革の土台となった書簡である。

④キリスト者の自由の「マグナ・カルタ」(自由の大憲章)だと言われる。

(4) ガラテヤ人への手紙のアウトライン

- ①個人的弁明：パウロの使徒職(1:1~2:21)
- ②教理的教え：信仰義認(3:1~4:31)
- ③実践的教え：キリスト者の自由(5:1~6:18)

2. メッセージのアウトライン：この書簡の4つの特徴

- (1) 感情的な書簡
- (2) 厳粛な書簡
- (3) 信仰義認を宣言する書簡
- (4) キリスト者の自由を宣言する書簡

ガラテヤ人への手紙について学ぶ。

I. 感情的な書簡

1. ガラ1:6

Gal 1:6 私は驚いています。あなたがたが、キリストの恵みによって自分たちを召してくださった方から、このように急に離れて、ほかの福音に移って行くことに。

(1) パウロは、ガラテヤのクリスチャンたちの現状を知って、あきれ果てている。

- ①短時間のうちに、彼らの心が変わってしまった。
- ②彼らの信仰の内容が、パウロが教えた福音とは異なっていた。
- ③単純な福音の真理を離れて、「ほかの福音」に移って行った。

(2) 「ほかの福音」とは、「同質」ではなく「異質」な福音という意味である。

- ①「信仰のみ」という福音に別の要素を加えるなら、「ほかの福音」になる。

2. ガラ3:1~3

Gal 3:1 ああ、愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、目の前に描き出されたというのに、だれがあなたがたを惑わしたのですか。

Gal 3:2 これだけは、あなたがたに聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。

Gal 3:3 あなたがたはそんなにも愚かなのですか。御霊によって始まったあなたがたが、今、肉によって完成されるというのですか。

(1) 御霊によって始まったなら、肉によって完成されることはない。

- ①「義認は信仰によるが、聖化は業による」というのは「ほかの福音」である。

- (2) パウロの感情がほとぼしり出ている。
- ①福音の真理に関して妥協することは、決して許されることではない。
 - ②ローマ人への手紙は、パウロの頭から出た。
 - ③ガラテヤ人への手紙は、パウロの心から出た。

II. 厳粛な書簡

1. ガラ1:7~8

Gal 1:7 ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわけではありません。あなたがたを動揺させて、キリストの福音を変えてしまおうとする者たちがいるだけです。

Gal 1:8 しかし、私たちであれ天の御使いであれ、もし私たちがあなたがたに宣べ伝えた福音に反することを、福音として宣べ伝えるなら、そのような者はのろわれるべきです。

- (1) 人であれ天使であれ「ほかの福音」を伝えるなら「のろわれるべき」である。
- ①ギリシア語の「アナテマ」という言葉
 - ②ヘブル語の「ハラム」（聖絶）という概念から出たものである
 - ③ヨシ6章で、アカンが聖絶のものに触れたために、裁きにあった。
 - ④「アナテマ」を宣言された人や物に触れてはならない。
 - ⑤それに触れる人は、滅びるしかない。
- (2) パウロは、「ほかの福音」を宣べ伝えた者は、滅びると宣言した。
- ①厳しい言葉を使う理由は、このテーマがきわめて重大なものだからである。
 - ②真の福音を説くか、「ほかの福音」を説くかで、聞く人の運命が決まる。
- (3) この手紙は、行為の矯正ではなく、信仰の土台の矯正を目的としている。
- ①福音理解が異なれば、クリスチャン生活そのものが崩壊する。
 - ②ガラテヤ地方のクリスチャンたちの信仰の土台が、揺さぶられていた。

2. ガラテヤ人への手紙の中で欠落している要素

- (1) 他のパウロ書簡と比較すると、驚くべき差がある。
- ①褒め言葉、賞賛の言葉、感謝の言葉がない。
 - ②祈りの要請がない。
 - ③位置的真理への言及がない。
*クリスチャンは「キリストにあって」すべてのものを得ている。
 - ④パウロとともにいる人の名前が上げられていない。

Ⅲ. 信仰義認を宣言する書簡

1. ガラ1:11~12

Gal 1:11 兄弟たち、私はあなたがたに明らかにしておきたいのです。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。

Gal 1:12 私はそれを人間から受けたのではなく、また教えられたのでもありません。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。

(1) パウロ自身の経験を通しての弁明

- ①彼が宣べ伝えている福音は、人間が作り出したものではない。
- ②人間は、「信仰+人間の業」という「ほかの福音」を作り出してしまう。
- ③ユダヤ教も含めて、すべての宗教は何らかの形で「人間のわざ」を強調する。
- ④「救われるためには〇〇をせねばならない」というのがそれである。

(2) 「救いは信仰のみによる」というのが聖書の教える福音である。

- ①パウロはそれを神から直接受けた。
- ②これは、パウロの使徒職の弁明でもある。

2. ガラ3:6~9

Gal 3:6 「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」とあるとおりです。

Gal 3:7 ですから、信仰によって生きる人々こそアブラハムの子である、と知りなさい。

Gal 3:8 聖書は、神が異邦人を信仰によって義とお認めになることを前から知っていたので、アブラハムに対して、「すべての異邦人が、あなたによって祝福される」と、前もって福音を告げました。

Gal 3:9 ですから、信仰によって生きる人々が、信仰の人アブラハムとともに祝福を受けるのです。

(1) パウロは、アブラハムを例に上げる。

- ①信仰義認の真理が旧約聖書ですでに教えられていることを示そうとする。
- ②「彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」(創15:6)
- ③ここには、すでに信仰義認の真理が啓示されている。

(2) 異邦人もまた、アブラハムと同じように信仰によって救われる。

- ①イエスを信じる異邦人を、パウロは「アブラハムの子」と呼んでいる。
- ②「子(子孫)」という言葉は、「アブラハムに従う者」という意味である。
- ③これは、異邦人が「霊的なイスラエル」になるということではない。

④異邦人もまた、アブラハムと同じ方法—信仰義認—によって救われる。

(3) ガラテヤの信者たちは、律法を行うことで救いを達成しようとしていた。

①しかしそれは、アブラハムが救われた原則とは正反対の方法であった。

②アブラハム契約は、異邦人も信仰によって救われることを預言していた。

IV. キリスト者の自由を宣言する書簡

1. ガラ5:13~14

Gal 5:13 兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕え合いなさい。

Gal 5:14 律法全体は、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という一つのことばで全うされるのです。

(1) 自由が意味しているところを誤解している人は多くいる

①パウロは、キリスト者の自由の意味が誤解されることを恐れた。

②「自由があるなら、何をしてもいいのか」という疑問に答える必要がある。

(2) キリスト者の自由には、以下のような特徴がある。

①それは、何をしてもいいという意味ではない。

②肉の欲するままに生きるのは、自由ではなく放縦である。

③自由は、「キリストの律法」(6:2)を全うするために用いるべきである。

④「キリストの律法」とは、聖霊が与えてくださる愛の律法である。

⑤キリスト者の自由とは、愛を実践するための自由である。

⑥律法の全体は、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という命令をもって全うさる。

(3) 愛を実践するための力は、聖霊によって与えられる。

①旧約時代には、愛を実行するための力が欠けていた。

②キリストの復活と昇天以降、信者には聖霊が与えられるようになった。

2. ガラ5:16~18

Gal 5:16 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。

Gal 5:17 肉が望むことは御霊に逆らい、御霊が望むことは肉に逆らうからです。この二つは互いに対立しているので、あなたがたは願っていることができなくなります。

Gal 5:18 御霊によって導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいません。

(1) 私たちのうちにある2つの性質

- ①クリスチャンの内側には、古い性質と新しい性質が宿っている。
- ②古い性質とは、自己中心的な性質のことである。
- ③新しい性質とは、聖霊によって与えられた「神の子としての性質」のこと。
- ④相対する2つの性質が、日々主導権争いをしている。
- ⑤そこに、クリスチャンの葛藤が生まれる。

(2) 勝利ある生活の秘訣は、聖霊により頼むことである。

- ①聖霊に導かれて歩む人は、肉の願いからも律法の要求からも解放される。
- ②「**御霊によって歩みなさい**」(16節)とは、継続を意味する言葉である。
- ③古き肉の性質に従うか、御霊に従うかで、結果は全く違ったものになる。

(3) ガラ5:19~21

Gal 5:19 肉のわざは明らかです。すなわち、淫らな行い、汚れ、好色、

Gal 5:20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、

Gal 5:21 ねたみ、泥酔、遊興、そういった類のものです。以前にも言ったように、今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。このようなことをしている者たちは神の国を相続できません。

- ①罪を犯したクリスチャンは天国に行けないという意味ではない。
- ②継続的に罪を犯し続ける人は、自らが救われていないことを証明している。
- ③救われていないなら、当然天国には入れない。

(4) ガラ5:22~23

Gal 5:22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、

Gal 5:23 柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません。

- ①クリスチャンは、罪を告白することで、罪の赦しを受けることができる。
- ②御霊の導きに従う人たちは、豊かな実を結ぶようになる。
- ③パウロは、9つの御霊の実を例示しているが、それ以外にも色々あるだろう。

3. 適用

- (1) 古い自分はキリストとともに十字架に付けられたことを思い起こそう。
- (2) 御霊に導かれることを意識しよう。
- (3) 御霊の実を熱心に求めよう。

60分でわかる新約聖書(10) 「エペソ人への手紙」

1. はじめに

(1) エペソ人への手紙の位置づけ

- ①獄中書簡と呼ばれるものが、4つある。
- ②パウロがローマの獄中にあった時に書かれた書簡である。
- ③当時パウロは、皇帝ネロによる尋問が行われるのを待っていた。
- ④4つの書簡

*ピリピ人への手紙：エパフロデトが届けた(ピリ4:18)。

*エペソ人への手紙：テキコが届けた(エペ6:21)。

*コロサイ人への手紙：エパフラスが届けた(コロ4:12)。

*ピレモンへの手紙：オネシモが届けた(ピレ1:10)。

・オネシモは、コロサイの主人の元から逃亡した奴隷である。

(2) パウロとエペソの関わり

- ①第二次伝道旅行で、パウロの一行はアジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられた(使16:6)。
 - *そのため、マケドニア、アカヤで伝道することになった。
- ②第二次伝道旅行の最後、エルサレムへの途上、エペソを訪問(使18:19)。
 - *エペソは、アジアとヨーロッパを結ぶ重要な港であった。
 - *世界の七不思議のひとつアルテミス神殿があった。
 - *パウロは会堂でユダヤ人たちに語りかけたが、良い反応を得た。
- ③第三次伝道旅行で、約3年にわたってこの町で伝道を続けた。
 - *その結果、生涯で最大の成果を上げた。
 - *黙2~3章に出て来る「七つの教会」は、この時期に設立された。

2. メッセージのアウトライン

(1) 教理的部分：教会の本質(1~3章)

- ①キリストにあって選ばれた者たち(1章)。
- ②新しいひとりの人(2章)。
- ③奥義(3章)。

(2) 実践的部分：7つの歩み(4~6章)

- ①一致ある歩み(4:1~16)
- ②清潔な歩み(4:17~32)
- ③愛のある歩み(5:1~6)
- ④光の子らしい歩み(5:7~14)

⑤注意深い歩み(5:15~17)

⑥調和ある歩み(5:18~6:9)

⑦勝利ある歩み(6:10~24)

エペソ人への手紙について学ぶ。

I. 教理的部分：教会の本質(1~3章)。

1. キリストにあって選ばれた者たち(1章)。

(1) 父なる神による信者の選び(1:3~14)

Eph 1:3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちに祝福してくださいました。

- ①信者が受ける祝福は、筆舌に尽くし難いほど喜ばしいものである。
- ②私たち信者は、天地創造の前から、キリストにあって選ばれていた。
- ③この選びの目的は、私たちが「御前で聖く、傷のない者」になるためである。
- ④神による選びの素晴らしさを理解すると、御名を称えずにはおれなくなる。
- ⑤天にあるすべての霊的祝福
 - * 私たちは、贖いを受けた。
 - * 奥義を知らされた。
 - * 約束されたものを受け継ぐ者となった。
 - * 聖霊によって証印を押された。

(2) エペソの信者たちのための祈り(1:15~19)

Eph 1:17 どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。

Eph 1:18 また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、

Eph 1:19 また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。

(3) 教会はキリストのからだである(1:20~23)

Eph 1:23 教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

2. 新しいひとりの人(2章)。

(1) 死からいのちへ(2:1~6)

- ①救われる前のエペソの信者たちは、霊的に死んでいた。
- ②「空中の権威を持つ支配者として今も働いている霊」に従っていた。

*悪魔に従うことは、神に反抗することである。

③その彼らに、神の愛が示された。それが、イエス・キリストの福音である。

Eph 2:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、
Eph 2:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——

Eph 2:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

(2) 新しいひとりの人 (2:7~18)

- ①救いは自分の努力で勝ち取るものではなく、すべて神の恵みによる。
- ②感謝と喜びは、クリスチャン生活の基本的な要素である。
- ③救いは善行への報酬ではないので、自分の救いを誇る人は誰もいない。
- ④異邦人が信仰により教会の一員となったのは、恵み以外の何ものでもない。

Eph 2:14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、

Eph 2:15 ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、

Eph 2:16 また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。

- ⑤イスラエル人と異邦人との間には、「隔ての壁」があった。
- ⑥この隔ての壁は、モーセの律法に基づくさまざまな戒めである。
- ⑦しかし神は、キリストの十字架によって、「隔ての壁」を打ちこわされた。
- ⑧異邦人もイスラエル人と同じように、信仰によって神の祝福に与ることができるようになった。
- ⑨パウロは教会を「新しいひとりの人」と呼んだ。

(3) 神の御住まいである教会 (2:19~22)

Eph 2:20 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。

- ①教会の土台は、使徒と預言者である。
- ②「使徒職の回復」は、聖書的教えとは言えない。
- ③礎石(かなめ石)は、キリスト・イエスご自身である。
- ④イスラエル人信者も異邦人信者も、キリストを礎石とする建物に組み合わされ、全体として成長し、聖なる宮となる。
- ⑤その宮は、聖霊の働きによって神の住まいとなる。

⑥これが、聖書的教会の姿である。

3. 奥義(3章)。

(1) 啓示によって知らされた奥義(3:1~13)

- ①異邦人もまたイスラエル人と同じ祝福に与るようになった。
- ②この奥義は、教会時代になって、使徒、預言者たちに啓示されたものである。
- ③パウロが大胆に伝道できたのは、神の啓示を受けたという確信があったからである。
- ④教会は、「今天にある支配と権威」(悪魔と悪霊)に対して、神の豊かな知恵と計画のすばらしさを示すための器である。

(2) パウロの第2の祈り(3:14~21)

Eph 3:16 どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいませうように。

Eph 3:17 こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいませうように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、

Eph 3:18 すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、

Eph 3:19 人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。

II. 実践的部分: 7つの歩み(4~6章)

(1) 一致ある歩み(4:1~16)

Eph 4:2 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、

Eph 4:3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。

Eph 4:4 からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。

(2) 清潔な歩み(4:17~32)

Eph 4:17 そこで私は、主にあつて言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなししい心で歩んでいるように歩んではなりません。

Eph 4:22 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、

Eph 4:23 またあなたがたが心の霊において新しくされ、

Eph 4:24 真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。

(3) 愛のある歩み(5:1~6)

Eph 5:1 ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。

Eph 5:2 また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。

(4) 光の子らしい歩み(5:7~14)

Eph 5:8 あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。

Eph 5:9 ——光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです——

Eph 5:10 そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。

(5) 注意深い歩み(5:15~17)

Eph 5:15 そういうわけですから、賢くない人のようにはなく、賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し、

Eph 5:16 機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。

Eph 5:17 ですから、愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい。

(6) 調和ある歩み(5:18~6:9)

①夫と妻

Eph 5:22 妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

Eph 5:25 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。

②親と子

Eph 6:1 子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。

Eph 6:4 父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。

③主人と奴隷

Eph 6:5 奴隷たちよ。あなたがたは、キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。

Eph 6:9 主人たちよ。あなたがたも、奴隷に対して同じようにふるまいなさい。おどすことはやめなさい。あなたがたは、彼らとあなたがたとの主が天におられ、主は人を差別されることがないことを知っているのですから。

(7) 勝利ある歩み(6:10~24)

Eph 6:13 ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。

*霊的戦いで勝利するためには、人間の力ではなく、神の力が必要である。

*6つの武具は比喩的言葉。それぞれの役割を論じても意味がない。

*これらの武具のほとんどが、防御的なものであることに注目しよう。

①「真理の帯」

*神のことば、より具体的にはキリストの福音のことばであろう。

②「正義の胸当て」

*信仰により、恵みによって義とされているということであろう。

③「平和の福音の備え」

*福音が与えてくれる平安によって心が支配されている状態であろう。

④「信仰の大盾」

*イエスを信じる信仰、父なる神が必要を満たしてくださるという信仰。

*悪魔や悪霊からの誘惑のことを「悪い者が放つ火矢」と表現している。

*これもまた比喩的言葉である。

⑤「救いのかぶと」

*信仰により恵みによって救われたということ、思い出すということ。

⑥「御霊の与える剣」

*これは「神のことば」であり、これだけが攻撃的武器である。

*啓示された神のことば、福音のことば、それらが「御霊の剣」である。

*神の武具はすべて、「みことば」と関係したものである。

*武具の機能を個別に論じるよりも、「みことば」を学び、状況にふさわしいみことばを適用する能力を養うことのほうがよほど重要である。

*主イエスも、「みことば」を引用し、サタンに勝利された。

⑦御霊による祈り

Eph 6:18 すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。